

岡田三面子編著
中西賢治校訂

日本史傳心柳狂句

十五

古典文庫

岡田三面子編著
中西賢治校訂

日本史傳心柳狂句

十五

古典文庫

昭和五十二年十一月二十日印刷發行

非売品

校訂者 中西賢治

発行者 吉田幸一

印刷者 白橋印刷所

日本史伝川柳狂句
第十五冊

発行所

114

東京都北区西ヶ原
三ノ三四ノ一二

古典文庫

電話(九一〇)二七一七
振替口座東京九・一四五九七番

凡 例

一、第十五冊として、三面子原文の第十四冊の終、近古之巻、三、南北朝時代「白蓮社」(一二三九三頁)から、第十五冊「徒然草」第八七段(一二五〇〇頁)までを収めた。

一、校訂に際しては、三面子原文を見得る限りの原本によつて照合し、欠字(伏字)を充填し、出典を補訂した。

一、終に、翻刻に当り、三面子原文の欠字充填その他について、貴重な資料を御貸与賜り、また、多くの御援助を忝うしました大坂芳一・大澤美夫・倉島長生・進士慶幹・鈴木一・千葉治・中西孝雄・延廣真治・芳賀定・花崎清太郎・濱田義一郎・廣田政之進・南得二・山澤英雄の諸氏、其他お名前は記しませんが多くの皆様方、また、閲覧を御許可下さいました国会・東京都中央・東洋文庫・日本大学総合・無窮会の各図書館並びに日本大辞典刊行会に感謝致します。

昭和五十二年七月七日

中 西 賢 治

岡田三面子先生遺稿

日本史伝川柳狂句 第十五冊

近古之卷

三、南北朝時代（自一、三三四至一、三六七）

○白蓮社（二三四）

○泉州堺市の東方、正中元年後醍醐天皇の勅を奉じ、澄円菩薩智演開基、浄土宗の甘露山大阿弥陀経寺は、白蓮社を以て知らる、左記第一句の舎とあるは、別の結社か未詳、

濁りたる友にハ染ぬ白蓮舎

嘉三・風一三才

——何とて露を玉と欺くの連想

白蓮社友はたまにもあさむかず

新三五・八九ウ

露の身を悟り蓮社の友因。

新五百・下六七オ

——友ちなみと訓むか？

○太郎左衛門（二三三四）

○姓は斎藤、名は利行、としゆき正中元年北条氏討伐の謀露はれたるに因り、
後醍醐天皇高時の忿をいかり静めんと告文を賜ふ、高時の臣斎藤太郎左衛門
主命により、之を抜き『叡心不偽処、任天照覧』と読むや、忽ちまたこくら眼眩
み血を吐き、其儘退出して七日の内に死せり（太平記卷第一）

告文を読んでウ。ン。ツ。ク。太郎左衛門

傍二・二八ウ

——運尽くと、雲突、まぬけの秀句

富の札買でウ。ン。ツ。ク。太郎左エ門

俳諧鑑七・上一四ウ

○夫木集（二三三八）

○夫木和歌集三六卷、藤原長清が諸勅撰集及び諸家集に漏れたる和歌を集めたるもの。撰成り、夢に大江匡房扶桑集と称せよと云ふを見、師冷泉為相（後醍醐嘉暦三〇二三三八年薨）に謀り、扶の夫と桑の木とを取りて名づく、

伐破て表題にした夫木集

嘉七・入二オ

御妾に解せりや盲亀のフ。木集

一〇一・三三オ

——浮木・夫木

○有也無也関（二三三八）

○陸前と羽前との堺にして、関は羽前の方にありしといふ、

一、牟夜牟夜関むやむやのせき

○又の名を斯く云ふ。八雲抄

看此辭

『武夫の出づさ入るさにしをり榮するをち

く／＼とちのむや／＼の関』、草木森々榮せざれば往来し難かりしと、
左記四句別個の故事を詠めるものならんも、未詳のまゝ爰に加ふ、

根深い智草を結ぶもほぐれぬ義

慶元・サイ三ウ

忠によりかけて軍慮に結ぶ艸

嘉七・入一五ウ

艸結ふ智恵軍慮につまつかす

嘉六・大ツ二ウ

助りし恩は枯さす結ふ草

安政元・リ三二オ

二、濛々もや／＼の関

○又いなむやの関とも濛々もや／＼の関とも云へり、前記夫木集『宿世山など

イナムやの関をしも隔てゝ人に音をなかすらむ』

歌枕『越しやせむ越さでやあらむ是やこの鳥屋とやとりのもや／＼の
関』、句の五両ハ或る謝罪金、

もや／＼の関をゆるして五両取

六一・一一オ

もや／＼の関を通して五両メ

六一・六オ

○竈かまど

山やま（二三三八）

○所在美濃『美濃の国竈の山に日暮るれば畑たえせぬ歎きをぞする』
前記夫木集、

風か来て柳烟らす竈と山

梅柳六・三五ウ

若草が春日はるひにもゆる竈山

一二三・六〇オ

煙りはと立ッ雲みゆる竈山

一二三・六二オ

竈山だいとこ台所めらハ見てたまけ

安政三・海三二オ

○逃げ 水（一二三三八）

○夫木集、俊頼『東路にありといふなる逃げ水の逃げ隠れても世を過
ごすかな』、同読人不知『武蔵野の草葉隠れに行く水の逃げ隠れても
ありとこそ聞け』

広い野を爰迄ござれ水ハ逝

三八・三四オ

逃水ハつかまへ所コのない名所

嘉七・神二〇オ

武蔵にハ臆病なもの水はかり

藐・一二オ

逃水を諸国から来て追つちらし

八五・八オ

にげ水をおつつまくつつ家を建テ

九・二三ウ

逃水も変り蔓の青海波

七七・一三ウ

逃た水迄呼井戸の繁昌サ

六五・一一オ

逃水も白水ニ成るはん昌さ

二九・三オ

逃水の土地にそだつてむかふミズ

九二・三一ウ

客の逃水吉原のもなかなり

二一・ス五オ

——十五夜

逃水を追ツかけて来る文づかい

三一・一三ウ

○藤原為相（二三三八）

○父は定家の子為家、母は為家の室阿仏尼、

一、冷泉家^{れいぜいけ}

○兄為氏と家邑の争生じたるに、母阿仏尼の訴により為相の有となる
(看阿^{くわあ}仏尼)、為相は冷泉家の祖なり、後醍醐嘉暦三年卒、

尼が旅寐で起かえる冷泉家

嘉六・佃三六ウ

二、称名寺青葉の紅葉

○相州六浦^{むつら}称名寺に、年々他に先だちて色附く紅葉あり、為相之を見て『いかにしてこの一本^{ひとつもと}に時雨れけん山に先立つ庭の紅葉々』と詠せしに、紅葉之を榮とし、功成り身退く時なりと、爾来は色附かざりしと(「謡曲と川柳」六浦)、之を青葉の紅葉といふ、

金沢の入江にひゞく称名寺

一五二・三四オ

称名寺庭の景色も秋の空

嘉三・小樽十の二四オ

晩鐘か青葉を洩る称名寺

安政四・マイ一六オ

言の葉の紅葉に残る称名寺

一二五・一五オ

見る人の無イが紅葉の名所なり

一一・四ウ

○暁 月（二三八）

○前記為相の弟、為家遁世清水寺に住し、暁月坊と称す、連歌の名家『遠くなり近くなるみの浜千鳥鳴く音に潮の満ち干をぞ知る』の詠あ

り、兄為家と同年に卒す（看 太田
道灌 六）

一、石一ツ給^たべ

○或る年の暮、祖父定家卿の許へ『暁月が師走のはてのそら印地年打ち起さん石一つ給^たべ』と、一首のざれ歌を送り、米を求められたる

に、卿より『さだ家が力のほどを見せんとて石を二つに割りてこそ遣

れ』との返歌と共に、米五斗を贈られしと

野崎左文翁
狂歌一夕話

石一ツたべとふつ附てハ言ハず

嘉四・入一七ウ

石の謎碎て五斗を送る米

嘉四・サクラ一五ウ

二、むくくくと毛

○未詳、

暁月風邪むくくと毛をはやし

新三八・稻一一オ

毛虫むくく暁月が庭を這

弘二・佃三一オ

○無礼講と玄恵（二三二九）

○一作玄慧、後醍醐元徳元年、日野資朝征東の為武士を近づくる方便